

ハンガリー動乱50年:20世紀の歴史における動乱

盛田 常夫

動乱が平定され、ハンガリーではソ連型の社会経済システムの再構築が進められた。この時期、つまり1950年代末から1960年代初頭にかけて、フルシチョフは米ソ平和共存路線を打ち出した。その背景には植民地独立による社会主義勢力の拡大という国際政治におけるソ連の優位性と、社会主義経済の機能障害の顕在化という正負の要因が複雑に絡んでいた。

56年動乱は20世紀社会主義の矛盾を爆発させたものであり、ソ連型体制の再構築では根本問題を解決できないことは明らかであった。しかし、米ソが対立する戦後の冷戦体制時代にはいまだ帝国主義時代の植民地体制が残存し、植民地国の独立闘争が活発化していた。旧宗主国である西側諸国に対抗する国際勢力、つまりソ連を中心とする社会主義国が、植民地独立の支援勢力として歴史的役割を果たす時代であった。

こうした国際政治における社会主義圏の優位性は、20世紀社会主義が内包する矛盾と限界を覆い隠してしまう結果になった。すでにソ連型の経済システムは絶対的な限界点に達していたが、国際政治における優位性がこの根本的矛盾解決への取り組みを蔑（ないがし）ろにした。

啓蒙主義と民主主義の相克

56年初頭のフルシチョフの「スターリン批判報告」は中・東欧各国を支配する小スターリン的指導者への政治批判を惹き起こし、各国共産党内部の権力闘争を誘発した。それが各国の政治体制の緩みをもたらし、共産党独裁にたいする国民の昔年の不満を爆発させた。ハンガリーでは社会機能を麻痺させる動乱となった。

共産党による一党独裁は社会主義体制実現を目的として合理化されたが、レーニン型の労働者党独裁は19世紀の絶対主義政治に対応する政治闘争路線に他ならない。一つの党だけが政治支配できるという考えは、19世紀の啓蒙主義的

絶対主義の思想である。つまり、労働者階級を導く党という思想は、1人の王に代わって少数の知恵者が政党を形成し、多数の無知の労働者大衆を導くという発想である。まさに絶対主義王政における王と民の関係そのものである。共産党の前衛思想は一種の賢人思想に他ならない。

このような賢人思想が有効なのは、国民大衆の公教育体制が確立されておらず、一部の知恵者（王あるいは独裁者）と大衆の知的水準の格差がきわめて大きい歴史時代である。このような社会では一部の知恵者による支配が「正当化」される。それが絶対主義的啓蒙王政であり、将軍支配に代わる天皇制支配も封建制から近代民主主義への移行期における啓蒙支配体制である。啓蒙主義体制の中で国民の教育制度が次第に確立され、初等教育から高等教育体制が確立されてくると、1人の人間あるいは一部の知恵者のみが政治を支配できるという思想は、その歴史的有効性を失ってくる。

20世紀前半における人類社会は、このような啓蒙主義と近代民主主義が混在する過渡的な社会であった。西欧では第一次世界大戦終結によって王政が廃止されるか弱体化され、近代共和制への道を歩み始めた。日本は天皇制下のデモクラシーという矛盾した道を歩み始めた。啓蒙主義と民主主義の矛盾の中からヒトラー独裁と天皇制ファシズムが生まれ、世界は再び大戦の時代に入ったのである。

20世紀半ばにおいても、人類は絶対主義の変容・継続と民主主義の相克に苦しんでいた。第二次世界大戦の終了はこの相克の最終的解決を可能にした。しかし、西欧は共和制確立への道を歩んだのにたいし、中・東欧は共産党による啓蒙主義的専制体制というソ連型の支配体制を強制移入することになった。かくして、戦後ヨーロッパは、西の民主主義と東の啓蒙専制主義へと分裂することになったのである。

歴史の逆説

西欧では戦後、個人独裁体制との歴史的決別が明確になった。つまり、ナチスドイツの敗北によって、西欧は19世紀型の絶対的啓蒙主義からの決別が歴史的課題となり、民主主義体制確立に向かって一挙に進むことになった。

他方、中・東欧は別の道を辿った。カリスマ指導者スターリンに率いられるソ連社会主義は、第二次世界大戦の勝利者である。したがって、ソ連はスターリンによる一党個人独裁という啓蒙主義と決別することなく、逆にそれを普及することになった。

明らかに、これは歴史の逆説と言える。西欧はドイツの敗北によって絶対主義との決別を実現できたのにたいし、ソ連社会主義は勝利したのために、絶対主義体制を維持・強化するという歴史に逆行する道を歩むことになった。そして、日本はどうか。天皇制専制国家が敗北し、民主主義への道を歩むことになったが、アメリカ主導による体制転換は日本人の思想改革を中途半端なものにし、天皇制絶対主義への郷愁を抱く層がアメリカ型の民主主義を導入するという矛盾したプロセスが進行した。まさにアメリカに追随しながら、天皇制を懐かしむという戦後日本人の一つの典型はこのように説明できる。

こうして、第二次世界大戦後、中・東欧各国にはスターリン型のカリスマ支配体制が構築された。ハンガリーではスターリンの忠実な「生徒」ラーコシが、カリスマ（小スターリン）指導者として支配した。個人独裁の横暴が社会に混乱と不満を蓄積させ、共産党内の権力闘争を惹き起こし、やがてソ連共産党内部におけるスターリン批判とともに、ラーコシ独裁（その追随者）への不満が爆発したのが56年動乱である。

スターリン批判と56年動乱は共産党内部に集団指導という変化をもたらしたが、共産党による一党独裁そのものを解消させることはなかった。共産党の啓蒙主義からの決別は20世紀社会主義体制そのものの崩壊を意味するがゆえに、中・東欧社会主義国では体制崩壊に至るまで複数政党制への転換を図ることができなかった。

20世紀社会主義の現実と矛盾

筆者は1990年に上梓した『ハンガリー改革史』（日本評論社）において、「20世紀社会主義は戦時社会主義を超えるものではなかった」と記した。19世紀に提唱され、20世紀初頭にロシアで実現した社会主義は、19世紀の人類史から誕生したものであり、啓蒙（賢人）主義と専制主義に色濃く彩られたものであった。

さらに、社会主義にはその出発点から独自の経済体制理論が存在しなかった。マルクスやエンゲルスは資本主義の批判的分析を行ったが、資本主義に代わるべき社会主義の経済理論を記したわけではない。市場経済を計画経済に変えるという基本発想はあったが、どのように国民経済を計画化するのか、その理論と手段が存在しなかった。蒸気機関や電気の普及が始まって間もない時代である。計画化とは名ばかりで、内実は鉛筆と紙による物資配分指令であった。

市場に制約を課して、経済計画に重点を置くというマルクスの考えは、きわめて先進的な思考である。20世紀の経済学はまさにこの思考の実現可能性を追求してきたと言っても間違いないであろう。戦後の西欧経済体制はまさに市場経済をベースにしながら、市場を制御する福祉国家の実現を図ったことを考えれば、マルクスの思想は20世紀を通して人類社会の形成に大きな影響を与えている。

他方、ロシアに成立した社会主義は、市場経済を完全に抹消して、すべてを「計画」で置き換えようとする試みであった。ところが、計画を実現する諸手段が存在しない。そこで参考にされたのが、戦時配給制度である。戦時司令部による物資調達と配給のシステム、まさにソ連社会主義に実現したものはこの戦時システムに他ならない。このような手法は一時的な便法として機能しても、長期的なシステムとして機能することはない。なぜなら、政治的な裁量で経済を機能させることはできないからである。

20世紀社会主義は戦時体制を超えるものではなく、最初から絶対的限界をもつ体制だった。

（関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）